

Mehr Zeit!



大 堺 利 行

このたび、近畿支部長を拝命しました。私の任期は一年ですが、来年の近畿支部長からは本部の理事を兼ねるため、任期二年になる予定です。支部長が理事を兼ねることは、都道府県の知事が国の大臣を兼ねるようなものです。本部理事会の方針と支部の意向が合わないとき、支部長が本部と支部の“板ばさみ”にならないか心配しますが、うまくやれば本部と支部の強力な“パイプ役”になれるでしょう。ただ、支部長は支部の本来の仕事が沢山ありますので、本部の仕事を任せすぎないようにしてほしいと思います。支部長が忙しすぎると、本部の仕事も支部の仕事も中途半端なものになってしまう恐れがあります。

忙しいという漢字は「心を亡くす」と書きます。最近、まわりの研究者を見ると、そんな人たちが増えているように思います。否、私自身がそうなのです。今から十年以上前は、じっくりと文献を読んだり、電気化学の理論式を解いたり、たまに学生と一緒に実験したり、一日の大半の時間を研究に費やすことができていました。しかし今は、申請書や報告書の締め切りに追われ、つまらない会議に時間を裂かれ、毒・劇物の管理などの雑用に忙殺されています。それでもお酒を呑む時間だけは死守していますが（笑）。なぜこうなってしまったのでしょうか？ 国立大学に勤める自分にとっての直接の原因は、あの「独（毒）法化」です。かつての国立大は、キャンパスのいたるところにペンペン草が生えていましたが、独法化にともなう管理強化のおかげで、キャンパスは一流企業のようにきれいになりました。しかし、外見上はきれいになっても、その中で働く教員は、本分であるべき研究・教育が満足にできず、心の中にペンペン草が生えてしまっている状況です。公立や私立の大学などでも同様でしょう。

2007年頃から日本の論文数が減少しているとネットで報告されています (<http://t.co/PY06Z7K0mp>)。他の国の論文数がすべて右肩上がりなのに、唯一日本だけ減少しているのは異常事態です。もし、日本の研究者が論文の「量より質」を重視するようになったのならいいのですが、論文を書く時間がないのが原因なら大問題でしょう。

どこかのだれかが、ドイツの詩人ゲーテの最期の言葉 Mehr Licht!（もっと光を！）をもじって Mehr Zeit!（もっと時間を！）と言っていました。まさに我々研究者の心の叫びでしょう。文科省は、教員の研究時間を確保するなんらかの施策を講じてほしいものですが、あまり期待はできません。結局、自分自身で自覚して時間をつくるしかないようです。

あのファラデーは、研究時間を裂かれるのを嫌い、王立協会会長職を辞退しています。そして、ファラデー自身による格言“Work, Finish, Publish”を実践し、多くの優れた論文を世に発表しています。みなさん、もっと“Work, Finish, Publish”しませんか？

〔Toshiyuki OSAKAI, 神戸大学大学院理学研究科, 日本分析化学会近畿支部長〕